

## 一．序にかえて

### ——ソ連型社会主義国家の歴史的位相

安 世舟

二〇世紀における最大の出来事が昨年末から今年初めにかけて起きた。それは、言うまでもなく、これまで米国と世界を二分してその覇権を争ってきたソ連邦という巨大国家の崩壊、いや解体という出来事である。この出来事のもつ歴史的、政治的意義を説明することは、おそらく今後、政治学は言うにおよばず社会科学のあらゆる分野の緊急の議題として提起されることであろう。なぜなら、ソ連邦という巨大国家の解体は、歴史上最悪の全体主義国家の消滅を意味するだけではなく、この巨大国家がかかっていた社会主義という思想、これは言うまでもなく、二〇世紀の政治を根本的に規定してきた理念であったが、この社会主義の危機を意味しているからである。わが国際比較政治研究所は、創立後まだ八ヶ月しか立っていないが、その目的からして当然この二〇世紀における最大の出来事の政治学的説明を今後の課題として取り組まねばならないものと考えている。しかし、発足後日も浅く、それを行なう態勢にはないが、さし当り、今回はその予備作業の一部として本研究所の第一回目のシンポジウムの形をとって、ソ連邦解体はなぜ起きたのか、そしてこの出来事の持ついろいろな問題点を析出し、それらが現代政治に対してどのような意味を持っているのか、そして二一世紀においてソ連邦の崩壊という政治的真空を埋めるものは何なのか等を概観してみたいと思う。

まず、「ソ連型社会主義国家の終焉と二一世紀への展望」をテーマとする今回のシンポジウムを始めるに当たって、司

会者の私から、ソ連型社会主義国家の政治思想史的位相を簡単に素描しておきたいと思う。

昨年八月、保守派のクーデターの失敗によってソ連共産党が解体した。その帰結が、言うまでもなく、昨年末から今年初めにかけてのソ連邦という巨大国家の崩壊であった。これら現象は、一九八九年初め頃から東欧各国に始まった「民衆的民主主義革命」の波が巨大なうねりとなって東進し、ついにソ連邦をものみこんでしまった結果である。この二、三年の間、かつてのソ連圏を襲ったこうした巨大な政治的地殻変動についていく／＼な評価が下されているが、それは評者の置かれた政治的立場によって各々異なっている。三年前の総選挙では、当時の海部首相は、東欧の変動を「自由主義の正しさを証明した」ものであり、「資本主義は社会主義に勝った」のだとふれまわり、また多くの保守主義者は海部首相と同様に、それを「社会主義に対する資本主義の勝利」であると主張している。次に社会党や民社党は、それを「社会民主主義の正しさ」を証明するものであると捉えている。日本共産党の場合幾分複雑である。同党は、ソ連型社会主義はマルクス主義的社会主義、すなわち「科学的社会主義」の逸脱形態であるので、ソ連共産党の崩壊は、当然レーニンやスターリンによって歪められた形態のマルクス主義的社会主義の崩壊であって、「科学的社会主義」そのものの崩壊ではないと主張して、ソ連邦の解体に伴ってマルクス主義的社会主義そのものの権威失墜という最悪の環境の出現の中で、なんとかそのかかげている「科学的社会主義」の権威を守ろうと必死の防禦戦を展開している最中である。

では、ソ連邦の崩壊は、本当に社会主義に対する資本主義の勝利なのだろうか。あるいはソ連邦の崩壊は、「マルクス・レーニン主義」のみの崩壊であって、マルクス主義的社会主義を含めての社会主義そのものの崩壊を意味するのではないだろうか。この問題は、今後、解明して行かなくてはならない課題といえよう。ところで、「マルクス・レーニン主義」はその起源がマルクスの思想にあり、社会主義の一種であるということについては異論がなからう。そこでソ

連型社会主義の崩壊についての論究に入る前に、そもそも社会主義という思想がどのような歴史的な状況の下で成立し、いつ頃から歴史を動かす大きな力になったのかについて簡単に回顧しておくのもシンポジウムを進める上において有益ではないかと思う。産業資本主義の進展の中で産業革命が勃発し、それは工業化の波となって西欧社会をおおうようになった。それと共に、西欧各国では農村共同体が崩壊し、それからはじき出された多くの賃労働者が工場周辺や、都市に集まり、新しい貧困層を形成するようになった。そればかりではない。この工業化、都市化という新しい社会的変動はさまざまな矛盾を生み出していった。まず価値体系の根本的变化をもたらした。それによって人間間の上下関係は身分ではなく、貨幣をどれだけ多く所有するかによって決められ、さらに政治を含めてすべての価値はこの資本主義的な経済的価値体系との関係の中でその優先順位が新たに決められていった。こうして中世においては異なる新しい社会的不平等が発生し、人口の圧倒的多数になりつつある賃労働者には新しい疎外状態を含めてあらゆる形態の疎外状態が襲いかかってきた。一七八九年のフランス大革命によって、すべての人間の尊厳と、そしてすべての人間の自由・平等・連帯がたからかに歌いあげられたにもかかわらず、現実の賃労働者の状態は眼をおおうばかりの悲惨そのものであった。すなわち、経済的抑圧、隷属、貧困、不平等、差別、人権蹂躪、不衛生で非人間的な居住状態、などの極度の疎外状況の中にあった。とはいえ、他方、このような状況を改善するためにどうすべきかについて、その解決策を考え、主張する者も当然現われていた。一九世紀初頭にフランスのサン・シモンやフーリエ、イギリスのR・オーウェンなどは労働者の集团的自助努力、言いかえるならば協同組合方式による社会矛盾の解決を主張し、否定すべき資本主義社会に代わる新しい未来社会のユートピアを提唱した。エンゲルスはこうした主張を「空想的社会主義」であると批判したが、しかしこうした主張が他ならぬ社会主義思想の嚆矢となったことは周知の通りである。一八四八年にマルクスとエンゲルスは『共産党宣言』を発表し、いわゆる「科学的社会主義」を主張した。マルクスは一八六二年『資本論』第一

卷を公表し、あらゆる疎外状況を生み出す根本原因は労働者階級の剰余価値を搾取して価値増殖をはかる資本主義経済システムそのものの中にあることを当時の産業資本主義経済を「科学的」に分析して実証してみせた。その帰結として、あらゆる疎外状況を除去すること、すなわち資本主義を打倒してそれに代わる搾取のない、そして「各人の自由の発展が万人の自由の発展の条件であるような一つの協同社会」＝共産主義社会を実現する任務は、資本主義の下では階級として絶対に救われる見込みのない労働者階級のみが果たし得る課題であるという結論を引き出した。こうした結論から、あらゆる不平等を是正する人類最後の解放の戦を行う歴史的使命が託されている労働者階級は資本主義を共産主義に変革するための階級闘争を開始すべきである、と労働者階級に呼びかけた。マルクス主義的社会主义思想の誕生である。

この思想が政治運動の形態をとり、歴史を動かす大きな力となっていたのは、初めはドイツにおいてであった。一八九〇年、十二年間のビスマルクの弾圧と戦い、合法性をかちとったドイツ社会民主党は、翌年の一八九一年にマルクスの『資本論』第一巻の基本的主張を取り入れた「エルフルト綱領」を採択し、マルクス主義的社会主义政党として世界の政治舞台に登場した。今から丁度百年前のことである。もっともヨーロッパにおいて社会主义が「自由・平等・連帯」のフランス大革命の理念の実現のために戦う労働者と知識人の小さなセクトから各々の国の政治を大きく規定する政治運動へと発展していったのは、一八七〇年代から八〇年にかけてのことであるが、その動きが最もダイナミックであったのが他ならぬドイツ社会民主党であったにすぎないのであった。したがって、言うまでもなく社会主义運動はドイツのみにとどまるものではなかった。イギリスでもフェビアン社会主义運動が、フランスでもマルクス主義的社会主义やサンディカリズムの形態をとった社会主义が擡頭しており、東欧やロシアでも同じ動きを見せた。しかし議会制民主主義が確立していたイギリスでは社会正義、すなわち、民主主義の理念を経済や社会の分野においても実現しようとする社会主义は、平和的かつ漸進的に議会主義のルールにのっとりて実現される可能性が存在していた。こうした方向

を進むフェビアン社会主義がイギリスではその地歩を確立していったが、それに反してツァーリの専制体制下に弾圧されてきたロシアや東欧の社会主義運動は、敵対する国家権力との緊張関係の中にあつて、敵との関係の中で社会主義実現の方法として議会主義は不可能、または自殺行為に通じるとの判断から暴力革命を主張する勢力が強まる傾向を示していた。一八八九年、フランス大革命百周年を記念してパリで社会主義政党的の国際組織として第二インターが結成されたが、それを指導した政党は言うまでもなくドイツ社会民主党であつた。したがつて第二インターはマルクス主義的社会主義政党的の国際組織の性格を強めていった。世紀の轉換期、すなわち一八九八年から一九〇三年の間に、マルクス主義的社会主義はその第一回目の危機を迎えた。ヨーロッパ列強間の世界分割をめぐる帝国主義的争いは、いづれ戦争以外に決着のつけようのないところにまで到つていた。目前に迫つた帝国主義戦争の前に、各国の社会主義政党的は、社会主義をどのような方法で実現すべきか、すなわち「革命か改良か」をめぐる、つまり社会主義実現の戦略をめぐる論争した。かの有名な修正主義論争である。この論争を契機に社会主義運動は二つの陣営に分裂した。ドイツ社会民主党の多数派は改革の路線を選択した。この路線は第一次大戦以降、社会民主主義と称され、西欧諸国の社会主義政党的によつて担われることになった。これに対して、革命の路線をとつたのはレーニンを指導者とするロシア社会民主労働党の多数派、すなわちボルシェヴィキであつた。一九〇二年に著わした『何をなすべきか』の中で、レーニンは少数の職業革命家の秘密結社、すなわち中央集権的な「前衛党」論を打ち出し、この政党的の指導する暴力革命による社会主義の実現を主張した。こうしてマルクス主義的社会主義をレーニンはロシア的特殊条件の中で修正し、特化させていった。これがいわゆる「マルクス・レーニン主義」という思想である。一九一七年三月、ロシアに革命が勃発した。いろいろな選択肢があつたが、結局同年十一月にレーニンという天才的な革命指導者によるボルシェヴィキ党的の暴力的な政権掌握が成功し、世界に初めての社会主義国家的の誕生をみた。要言するなら一九世紀前半期に成立した社会主義という思想

は、工業化・都市化の進展と共に社会正義に敏感な知識人や労働者の心を捉えて大きくなり、ついに一八九〇年代にはドイツ社会民主党の例にみられるように、大きな政治運動にまで成長していった。そしてついに一九一七年末にロシアの地においてレーニンによって脚色されたとはいえ、マルクス主義的社会主義が国家体制、すなわちレジーム (Regime) にまで発展を遂げていたのである。一九二四年レーニンが死去し、スターリンがレーニンの事業を継承し、ソ連型社会主義を建設していった。このソ連型社会主義国家は七〇年後の今日、われわれの目前でつい二週間前に崩壊してしまっただけである。

ところで、このソ連邦の崩壊によって国家体制、つまりレジームとしてのソ連型社会主義が拒否されたのではなく、いわゆる「マルクス・レーニン主義」の政党も、そしてその思想も拒否されたとみるべきであろうか。旧ソ連や東欧諸国において、確かにソ連型社会主義はレジームとしても、政党としても、思想としても、とにかく社会主義というものはすべて拒否されたかのように見受けられる。しかし、眼をその他の地域に転ずると、ソ連型社会主義がすべて崩壊してしまっただけとは言えないのではないかと思う。なぜなら、ソ連型社会主義をとっている中国、北朝鮮、ベトナム、キューバなどがまだ存在しているからである。したがってソ連邦の崩壊をもってソ連型社会主義の崩壊とは一概に言えないし、ましてやそれをもって「社会主義に対する資本主義の勝利」と言い切れるかどうか疑問である。確かに、ソ連邦の解体によって「マルクス・レーニン主義」の権威は失墜し、それに引きずられてマルクス主義的社会主义やそれを一部とする広義的社会主义も危機を迎えていることは確かである。しかしマルクス主義的社会主义のロシア的に特化された思想とそれがレジーム化したものが崩壊したからといって、それが直ちに「社会主義に対する資本主義の勝利」にはならないし、ましてや社会主義の終焉にはならないのではないかと考えられる。

とはいえ、成功した事実の威信によって、マルクス主義的社会主义の正統派を名乗ってきたソ連邦の崩壊によって

「マルクス・レーニン主義」の思想、その運動形態としての「前衛党」、そのレジームとしてのスターリン型一党独裁国家体制が原理的に二〇世紀の最後の時期に破綻をきたし、世界の人々に拒否されたことは確かなことであり、それは、広義の社会主義についてもその存在理由を問いかけるきっかけをなすものと受けとめなくてはならない象徴とみられよう。

そこで、本シンポジウムでは、二十一世紀に向けてこれからはたして社会主義にその存在理由があるのか、そしてもしあるとするなら、それはどういう形態のものなのか、を問う手掛りをうる一助ともなることを考えて、思想から運動、そしてレジームへと変態を遂げて、ついに崩壊していった「マルクス・レーニン主義」の国家を俎上にのぼせて分析・研究することになった。